

# 音楽的アプローチによる自閉症児への支援

— 幼稚園における実践を通して —

Supporting Children with Autism through a Musical Approach

— Practice in a Kindergarten Class —

谷 村 宏 子\*

## Abstract

Studies show it is more effective for supporting a child with autism in the sensorimotor stage of infancy than forming characteristics of self-image later on in their developmental stage because it becomes more difficult. This study was done on a girl with autism, age four, during the free time at her kindergarten. Once a week, for eight months, the reporter performed musical activities and made observations. As for sound being stimuli in the outside world, a child with autism, compared to a child without autism, were more sensitive to sound range and voices as it was heard in an environment. However, this showed that without regulating input senses, the child would process inappropriately and make it hard to form affective joint ownership. Therefore, in order to support the senses for hearing, vision, and touch, a processional instrument was used. At first, using the technique of mirroring for the girl, she built self-affirmation which comes with projecting the sounds. Then the activity was coordinated with the reporter and a piano player as they matched playing and stopping the instrument. There was a sense of self-fulfillment. The outcome of the musical activity with the autistic child seemed not to appear methodically with the stages of development, which Piaget showed, but rather a chance for the child to experience expressing emotion through rhythm and music. In addition, it was an opportunity to come to many realizations about performing individual expression, which led to participation in more class activities.

**キーワード：**自閉症児、音楽的アプローチ、情動の共有、音楽療法

## 1. はじめに

特別支援教育の導入に伴い、発達障害を含む支援の必要な子どもに対して、保育の場においても個別の指導計画の作成など、個別の指導が求められている。しかし、藤田は、「保育の場では未だ保育支援体制の整備が不十分なことから、様々な障害をもった幼児を統合し保育する方法論については、実践の中で模索している状態である<sup>1)</sup>。」と述べている。このように、個々の特性に応じた対応を保育者が活動の中で的確に支援することは、現状では困難であることが明らかになっている。また、聞き取り調査からは、保育者にとって特に自閉症児の支援が最も難しいと感じていることが、わかっている。

自閉症児への支援の手段として、音楽を媒介に行動の変容を目的とした音楽療法がある。ここで

は、音楽には子どもの発達を促進する様々な機能があることが明らかになっている。その音楽の機能として、感覚への刺激、生理的な快刺激、心理的抑圧からの解放、コミュニケーション手段などがある。幼稚園・保育所では、日々何らかの音楽活動が行われているが、これらの音楽の機能について保育者が理解した上で活動を行うことが、支援の促進につながると考えられる。しかし、保育者の多くはクラスの音楽活動において、自閉症児など特別な支援が必要な子どもを活動に参加させることに困難を感じ、模索している状態である。そこで、本論では、保育の場で行われる音楽活動においてどのような支援が可能であるか、幼稚園における事例をもとに個別指導を中心とした音楽療法の視点から分析する。

\* Hiroko TANIMURA 教育学部准教授

1) 藤田久美 2007 障害児と健常児が共に育つ場 山口県立大学社会福祉学部研究紀要第13号 37

## I. 音楽の機能による自閉症児への支援

### 1) 音楽療法による支援

菅井(1998)らの研究<sup>2)</sup>では、障害児の療育・保育・教育における音楽活動を有効にするため、言語行動形成の観点から体系化することを試みている。ここでは、音楽活動を人間行動の形成に分類し、音楽を聴くことは認知系と情動系、他者の動作表現を見て歌う行動は動作系に働きかけている。そして、これら全てに働きかけているのに音楽療法があると示している。

筆者が2009年3月に行った幼稚園教諭を対象としたアンケート調査(未発表)においては、9割以上の保育者が音楽療法について詳しく知りたいと考えているという結果が得られた。発達の促進を目的とした音楽療法の視点を保育に導入するには、音楽のもつ心理的、生理的、社会的作用を保育者が理解することが求められる。それら音楽の機能を活用しながら、個々の特性に応じた目標、教材、働きかけ方について考える必要がある。

### 2) 自閉症と音楽療法

自閉症児に対する支援の在り方としては、まず、場面や刺激を整理した少人数の中で、音楽を媒体としながら子どもの気持ちに沿ってゆったりとかかわることが大切である。そこで、子どもが音楽に気が付き、他者との関係性を知ることが活動に参加する動機づけとなる。特に、新規な場面を受け入れにくい自閉症児に対しては、活動の見通しが立つように視覚的な教材を用いたり、静かに落ち着ける場所を確保したりすることで、安心して活動に参加することができるよう環境を設定することが大切である。

自閉症の特徴について DSM-IV (アメリカ精神医学会) では、社会性、コミュニケーションの欠如、特異な行動パターンによって定義している<sup>3)</sup>。自閉症児は、活動や興味の範囲の限局、社会性や他者とのコミュニケーション能力の遅滞のために、対人関係や意思の伝達に困難をきたしている。感覚運動期の末期(1歳から2歳)に象徴的行動が開始される

が、他者の意図を推し図ることに問題がある自閉症児は、象徴的思考が困難であるといわれている。象徴的思考の発達、言語の獲得、自己像の形成という課題を達成するには、まず、様々な感覚器官を刺激する経験を多く積むことが大切である。その感覚器官を刺激する支援の一つとして音楽活動が挙げられ、その中で音楽のもつ治療的特質について、宇佐川は次のように示している<sup>4)</sup>。

- ①音・音楽は情動に働きかけ安定をもたらしやすい
- ②音・音楽は構造があり、繰り返されることで予測しやすい
- ③音・音楽は振動を伴い触覚や聴覚に働きかけやすい

また、音楽の心理療法的側面として、次の4点を挙げている。

- ①外界に合わせることで自己調節が図られる
- ②音楽を媒介としたやり取りへの発展
- ③三項関係を築きやすい
- ④役割取得行動を促す。

音楽教育者で音楽療法士でもあるゲルトルート・オルフは、感覚運動期の発達を援助することが認知的課題を推し進める上で不可欠であるとし、非言語コミュニケーションである音楽の有効性について指摘している<sup>5)</sup>。その中で、楽器の利点として、①音楽的・能動的活動を可能にすること。②楽器がセラピストと子どもとの間のつなぎ役として、距離を保ち強く結びつけることを挙げている。このように、子どもは楽器によって心のうちを伝え、非言語的コミュニケーションを積むことができるようになるといえる。

### 3) 脳の活性化

近年の脳科学の研究において、自閉症は、脳内のミラーニューロン<sup>注1)</sup>の機能不全が、共感の欠如、模倣の難しさ、関係性や言語の障害に関与するといわれてきた<sup>6)</sup>。その一方で佐伯(2007)は、「自閉症の子どもはミラーニューロンの反応が非常ににくいといわれています。それが関係性の障害とい

2) 菅井邦明、佐藤紘昭、久保山茂樹。1998 音楽活動のよる障害児の言語行動形成の条件。特殊教育学研究, 35(5).1-7

3) G・メジボフ M・ハウリー 監訳佐々木正美 2006 自閉症児とインクルージョン教育の実践岩崎学術出版社 2

4) 宇佐川浩 2007 感覚と運動の高次化による発達臨床の実際 学苑社 116-119

5) ゲルトルート・オルフ 1992 丸山忠璋訳 オルフ ムジーク テラピー 明治図書 162-165.

6) 奥村歩 佐々木久夫 2008 音楽で脳はここまで再生する 人間と歴史社 210

われるゆえんでもあるのですが、ミラーニューロンが全く存在しないのではなく、活性化するための親しい関係の構築が困難なためにミラーニューロンの活性化が普通は見られない」と述べている<sup>7)</sup>。また、「ミラーニューロンを活性化するための刺激としては、子どもが他者と同じ動きをしていると感じられることが重要である。そのためには、他者が子どもの行動を模倣する（逆模倣）ことが大事である。そこで、子どもも他者を模倣するようになる。」と述べている。

また、「音楽には模倣能力を育てる機能がある」と宇佐川（2007）<sup>8)</sup>が述べているように、音楽療法では音楽のもつ機能を利用してミラーニューロンの活性化につなげている。音楽療法では、演奏技術の向上というよりも感覚器官を刺激する音楽体験を多く積ませることが求められる。社会性の促進を目標に、楽器や歌を媒介に他者とのコミュニケーションを図ったり、模倣を促したりすることが可能である。さらに、音楽は運動の組織とも関連があることから、身体による同期へのきっかけになる。このような、音楽の機能を活かした自閉症児への支援を、幼稚園という保育の場では、どのように実践することが可能であろうか。筆者は、幼稚園で自由な遊びの時間に個別のアプローチを行った。

## Ⅱ．幼稚園における個別的音楽アプローチ

自閉症児が音楽活動の中でどのように他者を感じ、意識していくのかを知るために、まず、A 児の楽器の探索遊びを筆者が模倣することから始めた。素材が自然物である原初的な民族楽器は、視覚的な興味と共に触感覚の心地よさ、柔らかい音色による聴覚への快刺激をもたらす。A 児は、民族楽器であるレインスティックに惹きつけられた。楽器は筆者が持参したものと幼稚園の楽器を使用し、約 8 ヶ月間、幼稚園の自由時間に A 児への個別の音楽アプローチを行った。

### 1) アプローチの目的

個別の音楽アプローチの中で、音や楽器による自己表現を通して自己をコントロールしながら他者と合わせられるようにする。

### 2) 実施方法

200X 年 9 月から翌年の 4 月まで週 1 回、登園後、日によっては昼食後から降園までの自由遊びの時間に合計 21 回、教室隣のピアノのある部屋で行った。

### 3) 対象者

4 歳女児（以降 A 児）は、児童相談所で中度自閉症と診断され、園内では加配の保育者が付いている。A 児の発達上の特徴として、幼稚園では以下の点が挙げられていた。

①視線を合わさない。②言語によるコミュニケーションが困難。③色や登園時の道順にこだわりがある。④多動である。⑤食べ物や飲みものを要求する時には食べ物の名前は言えるが、場面に関係のない言葉を繰り返すエコラリアもみられる。⑥気持ちが混乱するとパニックになり裸足で外に出てしまうことがある。⑦家では音楽を聴くことを好む A 児であるが、幼稚園の音楽活動ですぐに離席し教室と廊下を行き来する。⑧人の多いところが苦手なため、砂や粘土遊びをしても他児が数名近づくと離れてしまう。

保育者としては、A 児が自己表現できる場を園内で作ることが必要と考えられていた。

### 4) 結果と考察

事例 1：1 回目（200X 年 9 月）【楽器の探索を通して、音楽の場を受容する】

筆者がマラカスをいろいろな方向から振り下ろしながらリズムを作って遊んでいる姿を見せると、部屋の中をウロウロと歩いていた A 児が近づいてきた。そこで、マラカスを机の上に置いてみるが、A 児は手に取らず、チラッと見て離れていく。次に筆者がボンゴを付点のリズムで叩くと、部屋の隅を歩く A 児の足取りがわずかながら軽やかに跳ぶように見える。同じリズムで楽器をカスタネット、ウッドブロック、カリンバなどに替えると音が変わったことに気付いたのか、楽器の方を見ることもある。しかし、筆者に近づこうとしなかった。次に、レインスティックをゆっくりと傾けながら音を鳴らしたところ A 児が近づいてきた。長さ約 80 センチの棒状の楽器を逆さまにすると、中の小さな種がサラサラ落ちる音が長く響く。音に合わせて「雨、雨・・・」と筆者が歌うと A 児が楽器に手を掛けたため「これ、欲しいの？」と聞きながら A 児の手にもたせる。A 児一人では楽器の音が鳴らないため、A 児は筆者の手をとり楽器の上に置いて鳴らして欲しいことを伝えた。「雨の音を聴きたいね」と声をかけて、レインスティックを A 児と一緒に逆さまにすると、A 児は最後の一滴まで落ちる音を聴きながらレインスティックを見ている。

7) 佐伯胖 2007 共感一育ち合う保育のなかで—ミネルヴァ書房 28

8) 宇佐川浩 2007 感覚と運動の高次化による発達臨床の実際 学苑社 132

考察：

A 児は最初、楽器で遊んでいる筆者を遠まきを感じながら部屋を歩き回る。楽器の音に変化することに気付きチラッと視線を投げかけるようにも見えるが、なかなか近寄らなかった。水がしたたり落ちるような音が長く響くレインスティックに興味をもった A 児は、自らも鳴らしたいという思いにかられたのか近づいてきた。しかし、手に持つと重く、音の鳴らし方がわからないために筆者の手を使って音を鳴らしたいという要求を伝えたものと推測する。ここでは、A 児が楽器とかかわるという二項関係であり、筆者を人というより道具的な存在として感じているようであった。

園のクラス活動では、好きな楽器を自由に鳴らすことより、統制のとれたリズム打ちなどに終始することになる。また、大勢が一度にバラバラに鳴らす楽器音の大きさに聴覚過敏の自閉症児は耐えられないこともある。そこでまず、個別の音楽活動の中で楽器に慣れることから、クラス活動に移行する方が、見通しがつきやすいと考えられる。A 児は視覚、聴覚、触覚を使ってレインスティックにかかわり、楽器で遊べる安心な場であることを認識したと思われる。

#### 事例2：3回目（200X年9月）【三項関係の萌芽が見られる】

A 児に圧迫感を感じさせないように、筆者は90度の角度に座り、長く響くエナジーチャイムの音を鳴らして自分の耳に近づける。A 児の前に楽器を差し出すと A 児も鳴らす。次に、A 児の叩き方を筆者が模倣するように叩く。交互に鳴るチャイムの音の響きに包まれながら筆者が立ち上がると A 児も連れて立ち、楽器を手にする筆者と目が合う。

考察：

人に対する警戒心が強い A 児の負担にならないように、正面に座位するのではなく筆者は横か斜め前に位置するように心がけた。楽器を交互に差し出すことで A 児と交代にエナジーチャイムを鳴らす交互奏となった。A 児の鳴らす音に対して真似る筆者の音は弱いので、A 児の音を反響したような演奏になった。交互奏に慣れ筆者が返す音が遅れると A 児は「あれ？」という思いで筆者を見る。また、筆者が立ち上がると A 児も立ちながら視線が合うな

ど、音に集中しながらも筆者の行動を意識していることがわかる。

ここでは、事例1の楽器との二項関係から楽器を媒体として他者を意識した三項関係への萌芽が見られる。「成立しにくい三項関係も音楽を用いることで、それらしき係わりあいになる」と宇佐川が指摘している<sup>9)</sup>ように、音・楽器を媒介とすることで他者への意識が容易であったと考えられる。また、「食べ物とともに音楽は、子どもの興味の対象となりやすく、子どもが興味をもつ対象を療育に取り入れることが大切である」とショプラーは述べている<sup>10)</sup>。新規な場面が苦手な自閉症児にとって、新しい活動への動機付けは、食べ物などの身近な素材や興味ある音を媒介にしてかかわることが大切である。

#### 事例3：9回目（200X年11月）【他者と曲の終止を合わせる】

クラス活動では A 児の知っている童謡が聴こえてくると一瞬、ロックンロールの常同行動を止めて首を傾げて聴き入るような態度も見られるが、部屋から飛び出す A 児を加配担当者が追いかけることが多い。

歌声にはほとんど興味を示さないが、ピアノ伴奏付きの童謡は聴いていることが多いことがわかった。そこで、個別において、ピアノと一緒に弾きながら歌うことにした。A 児は歌の曲が聴こえてくると、拍を取るかのように身体を前後させながら歌に合わせてピアノを両手で打ち鳴らす。音は適当であるため歌の伴奏と調和しないが、「おかあさん」など童謡の終止を筆者と一緒に合わせられる。即興曲の場合も最後を少しづつゆっくりすることで A 児は曲の終わりに気づき、テンポを感じて終止を合わせられることが多くなってきた。その後、何度も筆者の手をクレーンハンドにしてピアノの鍵盤に置きピアノの弾き歌いを催促し、同じ歌を何度も繰り返し歌うことを要求する。

考察：

A 児が連弾演奏の要求を筆者にクレーンで伝えた事例である。保護者によると家では歌番組を好み、姉がピアノを弾く環境でもあるため A 児自身もピアノを弾くことに興味を持っていたと考えられる。A 児は伴奏者と共に演奏することで、あたかも自らがピアノを弾いているように感じながら、筆者の終わりの意図を曲のテンポからキャッチして終止を一致させる。A 児自らの行動を他者の意図する行動に合わせようとするこの体験は、音楽による協同的な活動といえる。既成の歌の終止は言葉によっても分かりやすいが、筆者の即興の曲にも合わせられるこ

9) 宇佐川浩 2007 感覚と運動の高次化による発達臨床の実際 学苑社 122-124

10) M. D. ランシング著 佐々木正美、大井英子、青山均訳 1985 自閉症児の治療教育プログラム ぶどう社 88

とは、音楽を集中して聴いているということがわかる。宇佐川が「音楽活動について、テンポに合わせて自己の運動を調節する感覚運動の重要な発達を促すことに意味がある」と述べている<sup>11)</sup>ように、音楽を媒体に他者に合わせて自己調節をする機能がある。この段階はトマセロらの研究によるところの「注意に追従する」という模倣の一手手前の段階であると考えられる<sup>12)</sup>。

#### 事例4：15回目（200Y年2月）【好きな歌で気持ちの切り替えができる】

A児は色へのこだわりが強く、服を着る際に黄色の服や下着類を着たいということで母親に叱られ、機嫌が直らないまま登園した。部屋の入り口で靴や靴を投げて混乱していたが、保育者はA児の好きな身体を後ろから持ち上げて回転することを試みた。そこへ筆者がA児の好きな歌「お正月」の弾き歌いを始めたところ、ハッとA児の表情が変わり筆者の所に来てピアノを弾き始め、落ち着いた表情になった。

A児は、ピアノに合わせて「お正月」の最初のフレーズを何度も繰り返して大きな声で歌った。

考察：

多動の背景には平衡感覚系の反応の鈍さが原因であるともいわれているが、揺れ遊びや回転遊びなど前庭覚を刺激する感覚統合療法を取り入れることで好転することがある<sup>13)</sup>。そこへA児の好きな歌「お正月」が聴こえたことで、ピアノを弾くというA児にとって興味ある活動状況が蘇ったと考えられる。情動に働きかけ安定をもたらしという音楽の機能が、行動の変容をもたらしことができたのであろう。

「お正月」はゆったりとした4拍子の歌である。A児は「お正月」の歌を歌う時には、身体を前後に揺らしながら1拍目の強拍部分を強調して歌う。A児の話し言葉はほとんど聞かれないが、メロディーにのった好みの歌は、歌詞のとおり自信をもって歌える。このような音楽にのった言葉は、発語を促す上で意味のある経験になると考えられる。

#### 事例5：21回目（200Y年4月）【クラス活動のリズム表現に参加する】

A児はクラスの一斉的なリズム表現活動に参加し、歩く、スキップなどリズムに合わせて楽しむ様子がみられ

た。21回目の参加初日には、保育者や友だちに賞賛されたところ、A児は嬉しそうな表情をしながら一緒に拍手をしていた。

「お正月」の歌を毎週、繰り返し聴いていたA児が、個別のアプローチで初めて1番を最後まで歌うことができた。季節柄、クラスの活動で歌うことはできないが、幼稚園の場で「歌う」という表現がみられた。

考察：

A児は言語によるコミュニケーションに問題があるため、友だちとルールのある遊びに参加することは困難である。年長クラスになると子ども同士の中でも相手の意図を組んだ言語によるコミュニケーションが活発になり、クラス内でA児が自己表現する場が少なくなってきた。しかし、個別のアプローチで体験したリズム表現をクラス活動でも再現することで、A児に参加しようとする態度が見られた。A児は、活動の流れを徐々に把握できるようになり、楽器遊びやリズム表現の順番を待つことができるようになってきた。また、A児自身が見通しを持って活動に参加できるようになり、椅子に着席する時間も長くなってきた。クラスの音楽活動への参加を他者に認められ、褒められる経験は、A児にとって行動の動機付けにつながったと考えられる。

その後、保育者はクラス活動でも、リズム遊びの時間や自由に音を創作する楽器遊びの時間を設けられ、A児が集団の中で自己表現できる場をもてるように配慮されるようになった。

### Ⅲ. 総合的考察

自閉症の特性として、模倣の困難さ、コミュニケーションの取りにくさ、社会性の問題など、コミュニケーションの発達に関連した項目が多く挙げられる。そこで自閉症児が定型発達児と共に生きていくために必要な社会性を支援していく必要がある。人と人が一緒にできるという共同注意、情動の共有、さらに、意図の共有を発達させることが大切になる。長崎<sup>14)</sup>は、初期社会的発達についてレベルⅠ～Ⅲの3段階に、その発達領域を模倣・役割、共同注意、情動共有、コミュニケーションの4つに分けて分類している。

レベルⅠは、「行動と情動の共有」とし、生後6～8ヶ月の乳児はアイコンタクトによって情動が共

11) 宇佐川浩 2007 感覚と運動の高次化による発達臨床の実際、学苑社 132

12) マイケル・トマセロ著 大堀壽夫、中澤恒子、西村義樹、本多啓訳 2006 心とことばの起源を探る 勁草社 84

13) 木村順 2006 育てにくい子にはわけがある―感覚統合が教えてくれたもの― 大月書店 83-89

14) 長崎勤 2009 自閉症児のための社会性発達支援プログラム 日本文化科学社

有されるとしている。レベルⅡは、「目標と知覚の共有」とし、大人からの働きかけに応じて成立する受容的な共同注意が可能になるとしている。レベルⅢを「意図と注意の共有」とし、興味をもった玩具を大人に見せるという提示行動など、子どもが大人に注意の共有を促す能動的な共同注意が可能になるとしている。次に各レベルの目標と音楽活動の中でできることについて述べたい。

初期のレベルⅠでは、子どもが大人の存在に気づき、注意を向けることや快情動を共有することが目標となる。しかし、自閉症児は大人の行動に視線を向けることや表情で情動を表すことが苦手な場合が多い。そこで、子どもにとって、関心の強い感覚刺激を介した遊びや、大人が子どもの行為を模倣するという逆模倣が有効である。音楽活動では子どもの声や楽器音に即時、音として返すことが可能であるため、逆模倣を容易に行うことができる。

レベルⅡでは、大人の誘いかけや視線に子どもが気づいて、注意を向ける遊びの中で三項関係を築き、大人の模倣をすることが目標になる。ここでは、大人の楽器演奏という聴覚刺激と視覚刺激に対して同じように子どもが演奏することによって模倣が可能になる。さらに、レベルⅢになると、具体物ではなく意味するものとしての表象を共有することになる。聴覚的表象である音楽のリズム、テンポ、表現に注意を向けることから、大人の表現の意図をくみ取り終止を合わせるなど、模倣だけではなく大人の意図を感じて合わせられるようになってくる。このような一連の段階を体験の中で積むことが、自閉症児への支援につながると考えられる。

さらに、自閉症児への支援方法として長崎は、まず大人とのかかわりを基盤としながら子ども同士のかかわりへと発展させることを目指している。つまり、子どもと保育者との関係性が重要なのである。繰り返される共同行為の中で子どもが大人に援助されながら活動を理解し、主体的に参加できるようになることを目標としている。そこでは、子ども自身が自信をもって取り組むという快の情動をもち、この情動を他者と共有することが大切である。これらの段階を踏まえながら、筆者はA児と音楽活動の中で個別にかかわってきた。音楽表現の楽しさに

よって情動を呼びおこし、他者との共振によって情動を共有させ、音楽活動がコミュニケーションへの発露となることを目標とした事例であった。次に、事例からA児の情動の変化、および、獲得した社会性についてまとめる。

初回のセッションでは、A児は加配の担当者から離れなかった、しかし、楽器で遊ぶ筆者の様子を見ていたA児は徐々に楽器に興味をもち、筆者の近くに加配の担当者と共に来るようになった。A児はレインスティックをはじめ、ボンゴ、スリットドラム、カリンバ、トーンタング、太鼓などアジア・アフリカの民族楽器をはじめ様々な楽器の音の探索を行った。特にA児は、レインスティックやトーンタングなど木質系の柔らかい音を好み、トライアングルやベルなど金属的な鋭い音に耳を塞ぐなど好まなかった。A児の聴感覚は過敏で高音を受け入れにくいことがわかる。この段階では、人への関心よりも楽器という物への関心が強く、A児と楽器の二項関係の時期である。

事例2では、A児の楽器操作を筆者が何気なく模倣することや、目の前にある楽器を順番に叩くうちに交互奏になるなど、A児は楽器という媒体を通して他者の存在を感じることができ始めている。「発達は共感的なかわりから始まり、様々な媒体を通して関係性の中で広がる」と佐伯が述べているように<sup>15)</sup>、言葉でのやりとりが困難なA児とのかかわり方を模索する中で、楽器音という非言語的コミュニケーションを媒体に、音を響かせ合いながら音・音楽をつくる過程は三項関係への萌芽であったと考える。

大神は、「乳幼児は自分の行動に何らかの反応を示す他者よりも、自分の行動をそのまま模倣する他者の方を注視して微笑みかけることが、グルゲリーの実験から明確になっている<sup>16)</sup>。」と述べている。つまり、筆者がA児の行動に反応するより、A児は自分の行動を他者に真似される逆模倣にむしろ関心を示し、そこから自己と他者間を認識しやすくなるということである。このような相互模倣について大神は、「自閉症児の支援として共同注意のスキルや社会性相互作用を促進するうえに効果的である」と述べている<sup>17)</sup>。自閉症にとって課題である模倣

15) 佐伯胖 2007 共感—育ち合う保育のなかで—ミネルヴァ書房 34

16) 大神英裕 2008 発達障害の早期支援—研究と実践を紡ぐ新しい地域連携— ミネルヴァ書房 151

17) 前掲 152

は、楽器演奏をはじめ、歌唱、身体模倣など音楽を伴う活動の中で、言葉以外の様々な手法で行うことが可能である。

事例3では、筆者が童謡をピアノで弾き歌いを行う横で、A児は拍を感じながらピアノによる表現を行っている。歌に同期したA児のピアノは、曲に合わせて表現したいという気持ちの表れともいえるだろう。ここでは、外界の刺激であるピアノの音が、A児の内界に持つリズムと一致し、一定の構造の中で拍を合わせるという表現の契機を獲得したと考えられる。

個別のアプローチを始めて半年後の事例4では、朝から機嫌が悪い状態であったが、4ヶ月間A児からリクエストされていた「お正月」の歌を聴くことで、自分なりに気持ちの切り替えができたといえる。A児は自分にとって好きな歌を聴くことで、過去の楽しかった体験を突然思い出したかのように行動が変わったといえる。感情のコントロールを自分自身で行うことが困難な自閉症児であるが、過去の体験と音楽が結びついた記憶を取り戻すことで行動に変容をもたらせたと考えられる。

事例5では、A児は個別で行ったスキップの表現を、クラスの一斉のリズム活動の中でも楽しむようになった。これは、個別指導の時と同じ音楽を聴くことで、音楽と運動が協応した体験が思い出されてクラス参加につながったと考えられる。音楽と運動の連鎖については、神経メカニズムを解明しているタウトの実験からも分かるように、運動反応は聴覚リズムに同調することが指摘されている<sup>18)</sup>。つまり、音楽のリズムが脳内の運動神経の組織化に影響を与え、身体の動きを誘発するといえるだろう。

個別の支援を始めて約10ヶ月後に、A児は今まで聴くだけであった歌「お正月」の1番の歌詞を、最初から最後まで歌う姿が突然見られた。また、家庭内でもA児は「お正月」を歌うようになったという保護者からの報告もある。言葉によるやり取りはまだ難しいが、リズム感のあるメロディーに乗った言葉を発しやすくなってきた。子どもによって、最初に歌う、動く、楽器演奏と、どの音楽表現が出るかは個々に異なるが、A児がクラスの音楽活動に少しずつ参加するようになってからは、A児が困っている時に周りの他児がA児に教えるなどクラス内の雰囲気も変わり、A児に協調的なかわり合いをもつようになってきた。

## おわりに

本稿では、楽器音による表現、他者とのピアノ連弾、身体表現などの自己表現が、A児にとって他者と合わせるきっかけになったことを示した。音や音楽によって聴感覚、視感覚、触感覚に働きかけることで、模倣能力や運動の協応性を育てることができると、音楽が多くの機能を有していることを保育者が認識し、音楽的アプローチによる支援の在り方について再考することが求められている。

注1：ミラーニューロンとは、霊長類などの動物が行動する時だけではなく、その行動を他の同種の個体が行っているのを観察している時にも発生する神経細胞のことである。1996年にジャコモらによって発見され、視覚のみならず聴覚刺激においても他者の行為をあたかも自分がしているかのように、自分自身の脳の中でその行為の神経が発火し、鏡のように反応するというものである。